

econ. No. 31

特集 地域とつながる!

地域とつながり、多様に展開する経済学部生の活動
& 地域研修報告会

連載企画 研究室の窓から

宇土至心先生 (5 ページ)

news 1 日本地域経済学会

大貝健二先生 (6 ページ)

news 1 経ゼミプレゼン大会

越後修先生 (6 ページ)

連載 column From a Distance ③

瀬川修二先生 (6 ページ)



▲インカレねむる2014で表彰された
大貝ゼミ生と水沼猛別海町長



interview OB 訪問—働きマン⑭ 彩木雅夫さん

(7 ページ)

news 2 特別講演「最近における税関行政について」

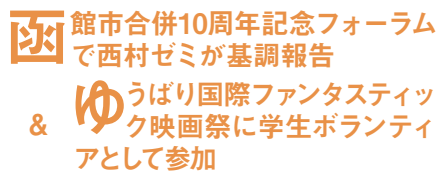
越後修先生 (8 ページ)

news 2 LIVE Voice

大貝健二先生 (8 ページ)

彩木雅夫 feat. 初音ミク『手紙 - The Letter -』

歌声合成ソフトウェアのバーチャル・シンガー「初音ミク HATSUNE MIKU」が歌う、作曲家彩木雅夫さん作曲によるCDアルバム。Illustration by ひーたん©Crypton Future Media, INC. www.piapro.net (関連記事は7ページ)

[illegible]

も同趣旨（当時は合併5年目）の調査を行ったのですが、その調査報告書がNHKの記者の方の目に止まり、函館市企画部の全面協力を得て、5年ぶりに昆布の浜を歩きました。12月には市の公式行事の記念フォーラム内で調査結果を発表する機会をいただき、学生には貴重な経験になりましたし、地域の人々がなかなか言い出しにくい本音を、第三者的な立場の若者が発表することで、地域づくりに一定の寄与ができたのではないかと思います。





インカレねむろでの発表（大貝ゼミ）

インカレねむろ会場



インカレねむろでの発表（大貝ゼミ）



大貝ゼミ地域研修成果、現地で発表

大貝ゼミは、2014年度に開催されたインカレねむろ推進事業・大学研究プロジェクト2014で、3位に相当する「インカレねむろ推進事業協議会賞」を受賞しました。同事業は、根室管内1市4町における交流人口の増加と地域内の資源を有効に活用し、大学の研究室・ゼミ等誘致の推進を図り、地域経済の活性化及び地域振興・発展を目指すものであり、北海道内5大学（北海道大学、釧路公立大学、北海道教育大学釧路校、札幌医科大学、北海学園大学）、道外4大学（法政大学、専修大学、帝塚山大学、阪南大学）の9ゼミが参加しました。

大貝ゼミは、「観光資源の再発見—ない

ところにあるもの—」というテーマで、これまで「地域研修」をはじめ、各種調査で入り込んでいる別海町をフィールドにして、8月と10月にそれぞれ3泊4日で調査を実施し、地域の観光資源を見つけ出すことに専念しました。観光振興を目指すときは、通過型観光から滞在型観光への転換が主張されますが、別海町内の宿泊施設7箇所にヒアリングをした結果、宿泊施設を軸にした域内循環の可能性や新規の宿泊キャパシティが、現段階では限定的であることを明らかにした上で、あえて「長時間通過型」観光を提案したプレゼンは、現地の方々を唸らせていました。こうした取り組みができるのも、地域研修を通じて現地とのつながりがあってこそだと思います。[大貝]

また毎年2月に夕張市で開催される「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」には、2年前からゼミ生有志がボランティア・スタッフとして参加しています（今年は26名）。最初のきっかけは地域研修の縁でした。同映画祭は2006年に発覚した市の財政破綻で一度中止になりましたが、NPO主催で復活しました。アットホームな市民の歓迎と、日本の映画界の未来を担う若手の登竜門としての評価は年々高まっていますが、慢性的な資金とマンパワーの不足に悩まされています。北大などの学生と一緒に会場運営などの業務を担い、よい社会勉強をさせてもらいました。

これらの取り組みで意識しているのは「地域と信頼関係を育むこと」。「研修」と言って地域に大学が一方的に負担をかけても、学生が地域の都合で一方的に使われても、よい関係は長続きしません。「win-winの関係」を求めて、今後も試行錯誤と改良を重ねていければと思います。

[西村]

川村ゼミ大学と労働組合による地域連携事業

川村ゼミでは、毎年、学生アルバイトの実態調査を行っている。全国大学生協や本学の調査によれば、およそ7割の学生がアルバイトを行っている。飲食店やコンビニなど学生の労働力なくして成り立たない業種は少なくない。学生もまた、様々な理由で——なかには、学費・経済問題を背景に——アルバイトに少なからぬ時間を費やしている。そのこと自体が問題なのではない。問題は、そのアルバイトという領域で、ワークルールが軽視されていることだ（詳細は、



労働組合での聞き取り調査（川村ゼミ）

ネットで公開中の白書を参照）。

<http://www.econ.hokkai-u.ac.jp/~masanori/index>

問題を調査で明らかにしたその上で、次は解決方法を考える。その際には、地域の労働組合のご協力をいただいている。労組の基本的な機能にはじまり、今日の職場で



映画祭に向けた地域連携シンポジウム（経済学部主催）



映画祭ボランティア



映画祭ボランティア（休憩時間に女優と記念撮影）



インカレねむろに向けて事前準備（大貝ゼミ）



映画祭に向けた地域連携シンポジウム（経済学部主催）



映画祭ボランティア



インカレねむろの授賞式（大貝ゼミ）

起きている深刻な問題や、一方での労組による問題解決方法などを、労働法や豊富な事例とともに教わる。そのなかで自分たちのバイト問題の解決方法を模索するのだ。

若者の「使い捨て」や「ブラック企業」が社会問題になっている今、教育機関で労働法や労働組合を学生が学ぶ意義は大きい。大学と労働組合による貴重な地域連携事業である。[川村]



札幌地域労組への聞き取り調査 (川村ゼミ)

水野谷基礎ゼミ



地域交流サロンびらけしを訪問、地域を学ぶ

本学のご近所である平岸地区には、まちづくりに関係する様々な団体が集まって設立した「平岸まちづくり協議会」があります。この協議会が平岸街道沿いの空き店舗を利用して「地域交流サロンびらけし」を2013年10月にオープンしました。地域市民が展開しているまちづくり活動の現状と課題を具体的に知り、地域社会に対する認識を深めるために基礎ゼミの授業でびらけしを訪れました。びらけしにはカフェも併設されており、飲み物を頂きながら、担当者からびらけしの設立経緯やイベント情報について話を聞きました。びらけしではすでに様々なサークル活動や各種講座が開かれ



地域交流サロンびらけし訪問 (水野谷基礎ゼミ)

ており、地元市民の憩いの場を提供していることを知る一方で、本学学生をふくめたより若い世代との交流の場を提供することが今後の課題であることを学びました。訪問後に基礎ゼミ生から感想を聞いてみると、びらけしの存在を初めて知るとともに、そもそも地域のまちづくり活動の具体的な場所を見学し担当者から生の話を聞くこと自体が貴重な機会であり勉強になったとの声が多くありました。このような地域課題を具体的に知ることで、大学での経済学の学びが地域とつながり豊かなものになればと願っています。

[水野谷]



地域交流サロンびらけし訪問 (右2枚の写真も：水野谷基礎ゼミ)



[平成 26 年 11 月 29 日・12 月 6 日] ゼミナール

地域研修報告会が行われる。今年は二部ゼミの報告も初参加

11月29日(土)と12月6日(土)の2日間、2014年度の地域研修報告会が開催されました。この報告会は、各ゼミの地域研修の成果報告とディスカッションを通じて相互に学びあう場といえます。今年度からは各ゼミの時間確保のため実施日を2日に分け、両日とも2教室を利用して実施しました。報告ゼミは二部1ゼミを含めて、合計23ゼミでした。

発表者は2年生(ゼミⅠ)、3年生(ゼミⅡ)が中心です。当然ながら初めて報告する学生も多いはずですが、毎年経験を積み重ねているかのように報告や質疑・応答のレベルが上がっています。報告においては、各ゼミ工夫を凝らして現地調査から導きだされた結論や課題を上手に整理してスライドを作成していました。また質疑・応答では、テーマが不明確なゼミがあれば厳しい質問が飛ぶなど非常に活発なやり取りがなされていました。もちろん多少緊張気味の学生も見受けられましたが、多くが堂々としたもので事前準備をしっかりと行ってきたと感じました。2004年に開始された地域研修報告会は今回で11回目を迎えました。各ゼミの報告内容が洗練されてきており、今後は一層「調査研究報告会」的な性格を強めていくのではないかと感じました。[浅妻]



研究室の窓から

— いつ、どのようにして企業収益に基づいて企業の価値を評価するようになったのか —

宇土 至心 経済学部講師
うとまこと

[専門は金融論、財務論、証券論]

●主な論文に、「A.S.Dewingにおける『企業の擬制資本化』の成立」(九州大学大学院『経済論究』第129号、19~38頁、2007年11月、単著)

経済学の道に進む

私の出身は、福岡県の飯塚市です。飯塚市は地理的には福岡県のちょうど真ん中にあり、山に囲まれた盆地に位置します。普通高校の理数科を卒業した後、実家が自営業だったこともあり、大学は経済学部に進みました。大学に入って最初に興味を持ったのはお金(経済学では貨幣)について、「なぜ単なる紙切れに価値があるのか」と思っていました。

大学に入学したのは1999年ですが、この時期の日本の金融システムは様々な問題を抱えていました。その2年前には山一証券や北海道拓殖銀行といった巨大な金融機関が次々に破綻しました。都市銀行は合併し巨大な金融グループを編成することで、何とか生き残ろうとしていました。日本経済がデフレ状態に陥り、日本銀行は金融政策の効果を失いつつありました。まさしく、金融が日本経済を大きく揺さぶっていた時期でした。

経済を支える「金融」の研究へ

金融とは「金銭の融通」であり、お金があるとところからないところへお金を回す仕組みを意味します。血液を通して身体中に酸素が供給されることで人間が活動できるように、金融を通して社会にお金が流れることで経済活動ができます。その意味では、金融は経済を支えるものであるはずですが、しかし、株式市場の暴落や金融システムの混乱が生じた場合には、脇役であるはずの金融が本来の主役である経済全体に悪影響を及ぼします。

その後、研究の興味は「なぜ金融が実体経済に深刻な影響を与えるのか」や「どのようにして金融取引が実物取引を超えて増加するのか」という点に変わっていききました。特に大きな影響を受けたのが、2007年頃に発生したリーマン・ショックです。アメリカの住宅ローンの問題が世界中に広まり、各国の金融市場の動揺が実体経済にも大きな影響を与えました。その際しばしば

指摘されたのが、金融取引が実物取引の何倍にも膨れ上がっている実態でした。ではなぜ、現代の資本主義経済では、実物取引を大きく超えるような金融取引が行なわれているのでしょうか。

これには様々な原因が複雑に関係しているでしょうが、私はいわゆる割引現在価値が大きく関わっていると考えます。割引現在価値は金融論ではとても大事な考え方で、大雑把に言えば、将来に得られると期待される収益(やキャッシュフロー)を現時点での価値に計算し直して、物事の損得を考えるやり方です。

この割引現在価値の優れた点の1つは、将来に収益(やキャッシュフロー)が期待できるものであれば、どんなものでも価値を評価することができる点です。例えば、設立間もない企業や資産が少ない企業などでも、割引現在価値により企業価値を評価する場合、将来の収益が有望であれば、企業価値も高いと評価されます。その結果、資金調達も容易になり、十分な設備投資が可能になるかもしれません。

一方で、所詮は将来という不確かなものでしかないのが、実現するかどうかは分からないという欠点もあります。また、将来への期待に基づいて価値を評価するため、将来に対しての期待が大きく変われば、評価される価値も大きく変わることになります。例えば、将来の収益に対して悲観的になることで、その企業の株価が大きく下落したりします。

このような問題意識を持ちながら、私は企業収益と企業価値評価との関係について、特に「いつ、どのようにして企業収益に基づいて企業の価値を評価するようになったのか」という問題について研究しています。現在は20世紀前半のアメリカを対象に、理論の変遷と経済の動きを踏まえた分析を行っています。

1つ目の理論の変遷については、当時の金融論や財務論(企業のお金に関する研究分野)の中で、どのような議論が展開されていたのかを調べるのが重要です。中



●本学図書館に所蔵されているA.S.デューイングの「The Financial Policy of Corporations」や「Moody's Manual」「CFC (The Commercial and Financial Chronicle)」など

でも私のお気に入りにはA.S.デューイングの書籍です。彼は、当時のアメリカの財務論研究を代表するThe Financial Policy of Corporationsを著した人物です。1919年に初版が出されたこの本は、1953年の第5版まで重版されましたが、興味深いのは、1920~30年代の改訂版においてそれまでなかった企業価値に関する議論が登場することです。このことから、1930年頃に企業価値に関する理論が誕生したのではないかと推測されます。

2つ目の経済の動きについては、当時の企業の財務活動や合併・買収の実態を調べたり、株価の動きや企業の収益の関係を調べたりしています。今から50年以上前の状況を調べることは大変な作業ですが、幸いにも本学図書館には過去の貴重な書籍や資料が沢山あります。中でもMoody's ManualやCFC(The Commercial and Financial Chronicle)といった企業の財務データに関する資料が所蔵されており、100年以上前のものもあります。このような貴重な資料に囲まれながら研究できることは、研究者としてとても幸せなことです。

[平成 26 年 9 月 20 日～22 日]

日本地域経済学会第26回大会が行われる

2014年9月20・21日に、日本地域経済学会が開催されました。地域経済学科が創設された2003年以来2度目の開催でした。1日目には「地域公開シンポジウム」が行われました。同シンポジウムでは、学会会員のみならず、本学教員、学生、一般市民の方も含め、150名以上の参加者がありました。また、シンポジウムでは、「地域の足づくりー生活インフラとしての公共交通を考えるー」をテーマとして掲げ、住民の生活の足である公共交通が果たす意義と役割、具体的な地域での取り組みについての報告と、活発なディスカッションが繰り広げられました。なお、シンポジウムのパネラーは、土居靖範氏（立命館大学名誉教授）、横山隆氏（札幌 LRT の会）、野村文吾氏（十勝バス株式会社代表取締役）、中島則裕氏（生活協同組合コープさっぽろ専務理事）の4名でした。

翌21日には、共通論題「自治体再編と地域経済の可能性ー『平成の大合併』から15年」が行われました。通常は、共通論題は学会会員のみで行われるものですが、きわめて今日的なテーマであるために、共通論題も公開して行い、多くの一般参加者が報告に耳を傾けました。平成の大合併が本格的に動き出してから15年、市町村合併特例法が定めた財政上の特例措置期間が終了し、再び地方財政危機が生じることが懸念される中で、合併した自治体の財政運営はどうなっているのか、また、増田レポートに示される「消滅可能性都市」をリストアップしたことの意味や道州制との兼ね合いなど、刺激的な議論が行われました。



左：共通論題、右：地域公開シンポジウム

[平成 26 年 11 月 15 日] 1 部ゼミナール / 経済学部ゼミナール協議会主催

経済学部プレゼン大会開催

11月15日に、経済学部プレゼン大会が開催されました。今年で第6回を数える同大会は、すっかり経済学部の一だ行事になったといえます。6ゼミ17チーム、計98名の参加ということで、数の面では少々さびしかったですが、質の面では高く評価できる研究報告が多くみられた大会でした。

参加する彼（女）ら同様（あるいはそれ以上に）、われわれ教員も結果にこだわっています。「我がゼミが参加する以上、勝たせてあげたい」というのが心情です（もちろん、審査は公平に行っています）。そのため、「大会のレベルが上がる→勝たせるために指導の水準を上げる→大会のレベルが上がる」という好循環が働いているように思われます。

プレゼン大会が、今後より良い大会になってゆくためには、お世話役の経済学部ゼミナール協議会の皆さんのより一層の努力が求められるわけですが、それとともに、上記のサイクルが回り続けるよう、教員の指導レベルの向上も不可欠です。私自身にとりましても、責任の大きさを改めて自覚させてくれた、有益な大会でした。[越後]



From a Distance 3

「信念について」

●瀬川 修二[経済学部教授]



北海学園大学ラグビー部 写真：I. SASAKI

ニーチェはアフォリズムで「信念は嘘よりも危険な真理の敵である。」と述べているが、この意味はすぐに理解されるほど明白でない。その理由は信念という言葉がここでは通常のポジティブな意味ではなく、思い込み、固定観念、狂信などネガティブな意味で使われているからである。嘘をつく人はそれが嘘であることを意識しているが、信念を持つ人は自分の考えが真実であり、絶対に正しいと信じている。だからこそ、信念は真理の危険な敵とみなされるのである。人類の歴史を見れば、人間は昔から個人、組織、国家の形で様々な信念、信仰、イデオロギーによって自己を絶対化し、自己とは違った他者存在を支配し、排除し、破壊しようとして戦争、殺戮を繰り返してきた。そして最近の世界情勢を見ると同じことを繰り返している。

真理の観点から見れば、信念（イデオロギー）は個人（組織、国家）の利害と結びついた思い込み、妄信であり、それは

単なる仮定、嘘として自覚され、相対化されるべきなのである。そうすれば、自己の絶対化はなくなり、自己以外の他者の否定、支配はなくなるだろう。しかし、それはなくならない。どうしてなのだろうか？

我々は通常、信念という言葉でニーチェが非難している意味とは違った形で使っている。たとえば、「信念をもって生きよ！」などのように。つまり、信念は思い込み、固定観念としての絶対化の危険性を持っているとしても、それは同時に個人、国家を強く支えているものなのである。

人間は存続していくためにはその基盤となる何らかの存在理由が必要である。そのために信念、信条、世界観が生まれてくる。

しかし、信念が人間存在を強く支えるものであるにせよ、それが絶対化されるとニーチェの言うように真理の危険な敵になり、自己とは違った存在の否定になってしまう。そのことに我々は注意しなければならないだろう。



1952年入学、花の三期生！ レコード界の大御所作曲家は、 初音ミクを操り活躍中

彩木 雅夫 (本名 新居 一芳) さん

さいき まさお

北海道私学で初の4年制大学として開学した本学。同時に現在につながる彩木雅夫さんの音楽人生をスタートさせたのもこの北海学園大学からだった。

◀アルバム「手紙 - The Letter -」をもって

作曲活動50周年！

一昨年、作曲活動50周年を迎えた彩木雅夫さん。その半世紀の節目を祝う記念の会で、「一北海道から発信し続けた」との功績に対して北海道知事から感謝状が贈られた。彩木さんは本学経済学部1956年卒業の三期生。本学生にとっては入学、卒業式に必ず歌われる「新学生歌」の作曲家として身近な存在だ。

1970年代の歌謡曲全盛時代、彩木さんの作曲した流行歌を知らない者はいなかったと言っている。ムード歌謡のヒットメーカーであり大御所作曲家のお一人である。若い世代には、レトロで魅力的な「昭和歌謡」であり、まして父母、祖父母世代にとっては、現在もカラオケで歌う定番曲だ。

作曲家としてのデビュー曲は、ブルーコメッツ「愛の終りに」（1966年／インストゥルメンタル曲）で、当時人気のイタリア、フランス映画のエンドロールに流れるような曲調。ムード歌謡一筋の彩木さんと思いきや、実はその音楽のベースは、大学時代に活動した軽音楽部にある。さらなる原点は帯広の実家が経営していたカフェの店内でいつも流れていたジャズやR&Bなどの洋楽だった。

彩木さんが本学に入学した1952年は、北海短期大学から4年制大学として出発した初年度。本来なら1期生のはずが短大からの編入生が上級生としている変則的な状況だった。北海道で初めての私立大学で自前の校舎もまだ無かった時代、自由な校風の中教職員、学生が一体となって校舎建設など大学の基礎づくりに取り組んでいた時期でもあった。「まわりを見渡してみるとジャズをやっている人が結構いました。みんな上手いんですよ」。そこで仲間と軽音楽部を結成。ハワイアンバンドとスイングジャズバンドと二つができた。校舎の建設資金を募るチャリティダンスパーティも開催、現在のサークル

（ジャズ研、ナレオハワイアンズ、カントリー&ウエスタン研究会など）につながる音楽系サークルの発祥となった。

「大学の4年間は音楽ばかり、我流なので譜面などあまり分からず、バンド演奏が入っているナイトクラブなどにアルバイトで行き、教えてもらったりしました。それでも軽音楽部顧問の三森先生、ゼミの池田先生など好きな先生の講義はちゃんと出席していました」ということだったが、就職では少々遅れを取り、手に職を付けようと東京の電気通信専門学校に通うことにする。

「父が三歳の時になくなり、母ひとり子ひとりという家庭であり猶予は無く、就職のために演奏活動も封印して猛勉強をしました」。

就職、そして作曲家の道へ

その甲斐があって1958年、HBC北海道放送に入社。郷里の帯広支社に配属となった。ふるさとにUターン、そこからまた音楽活動が復活、職場バンド「リズムクルッターズ」を結成し、同僚の結婚式などにはオリジナル曲を演奏するほどに。その後は音楽に対する思いが日増しに強くなり、7年間の帯広支社生活から札幌本社に転勤となったことが更に拍車をかけた。「音楽だけでやっていきたいと思い、作った曲をテープに録音、コロムビアレコードに売り込んだんです」。それが前述の「愛の終りに」だ。当時の北海道放送の上司も局長も、レコードが出るまで本当の話したとは思ってられなかったらしい。レコードが出て、初めて本当の話だと信じてくれたという。それからは、制作の方が向いているということで、技術職からラジオ制作に移り、作曲活動も仕事とは別途にやることを社長に認めてもらい、サラリーマンと作曲家の二足のわらじを履くことになる。三作目に作ったポップス感覚の歌謡曲が、今度はビクターレコードの目にとまる。当時デビュー間もない、かの森進一のヒット曲「命かかれても」だった。その後、森進一を見出したチャーリー石黒氏がわざわざ札幌まで会いに来て「これからは一緒にやりたい」と声をかけてくれたり、ミリオンヒット曲が続出、「花と蝶」「年上の女」（68年森進一）、「長崎は



本校校舎建設資金募集演奏会（1954年）



CDアルバム彩木雅夫 feat. 初音ミク「手紙 - The Letter -」（2014年11月発売）

今日も雨だった」（69年クールファイブ）、「なみだの掬」（73年殿様キングス）、「さようなら」（76年美空ひばり）などなど数えきれない程で、北海道放送の社長よりも収入が多くなった。とはいえ、本業の仕事はきちんとこなし、土日にかけて集中して作曲をする生活が続いた。1968年には東京に楽曲管理会社ミュージックキャップ・トウキョーを設立、ついには1975年北海道放送を退社、制作会社ミュージックキャップ・サッポロを設立することになる。世に送り出した楽曲350曲、日本を代表する流行作曲家となった。

そして、50年を経た現在も札幌を拠点に、作曲活動を続けており、昨年は「まさP」の名でインターネット「ニコニコ動画」に「初音ミク」の曲を投稿するとたちまち話題に。歌声合成ソフトを使い、インターネットに登場するや瞬く間に世界的なバーチャルシンガーとなった「初音ミク」までも使いこなす。本学卒業生の伊藤博之氏が社長をつとめる「初音ミク」開発会社クリプトン・フューチャー・メディア株式会社とのコラボレーションでCD発売と、新たな挑戦を続けている。

「好きな道を見つけたら、それにとことんどこまでもこだわっていくことが大事だと思う。こだわればこだわる程何ごとにも成就する。私の作曲活動の原点は、音楽にこだわり続けた学生時代のジャズバンド経験にあるんです」と、自身を振り返った。



profile
1933年 帯広市生まれ
1952年 帯広柏葉高校卒業
1956年 本学部1部経済学科卒業
1958年 北海道放送入社
1966年 作曲家デビュー
1976年 株式会社ミュージックキャップ・サッポロ設立



[平成 26 年 12 月 4 日] 2 部多国籍企業論特別講演

『最近における税関行政について』

講師 ● 函館税関総務部長 徳正芳氏

12月4日(木)、私が担当している「多国籍企業論」の講義時間に、函館税関総務部長の徳正芳氏を講師に迎え、『最近における税関行政について』とのタイトルで、講演会を開催しました。19時30分という遅い時刻からのスタートでしたが、約50人の学生が聴講に集まりました。税関の仕事イメージすることは、なかなか容易ではないのですが、たとえば近年問題になっている危険ドラッグの密輸の取り締まりも、大きな仕事の1つであります。国際的なモノの取引の管理業務を通じて、国民生活に豊かさと安全・安心をもたらす。それが税関の役割であることを、今回の講演会で教えて頂きました。

北海道経済の今後を考える場合、農産物の輸出は大きなポイントになります。対外取引が円滑化し、北海道経済が豊かになってゆくためのキーマンである函館税関の活動・活躍に、今後も注目してゆきたいと思いました。徳氏をはじめ、公演会の開催にご尽力頂きました皆様に、感謝申し上げます。[越後]

[平成 26 年 12 月 6 日・13 日] キャリア支援センター主催業界・企業研究会

LIVE Voiceを開催



12月6・13日、キャリア支援の一環としてLIVE Voiceが開催されました。内定者として参加していた篠木さんと根上さんに、お話を聞くことができました。

株式会社ロイズコンフェクトに就職が決まった篠木さん。大学生活では飲食店やアパレル関係のアルバイトに精を出し、いろんな失敗をしながら、まわりを気遣う気持ちの重要性を学んだり、お客さんに喜んでもらうにはどうしたらよいかを考え、実践していたそうです。

就職活動に対して意識を持つようになったのは、3年生の時にインターンシップに参加してから。当初は金融機関に関心があったのですが、就職活動を続ける中で、接客の方が自分に向いているのではないかと思うようになり方向転換をしたとのことでした。



上が篠木さん、下が根上さん

これから就職活動を始める後輩に対して、「早めに動くこと、他人の目を気にしないこと、とにかく必死なること」というメッセージを頂きました。

次に紹介する根上さんは、北海学園生協学生会委員会で活動しながら、授業も休むことなく、とにかく勉強を頑張った学生生



活を過ごしたそうです。根上さんの就職に対する意識としては、道内で働くことは考えていたけども、特に「これをやりたい」というものがなかったようです。しかしインターンシップを通じて、IT業界というこれまで全く知らなかった世界に興味を持つようになり、株式会社北海道CSKに就職を決めました。

後輩へのアドバイスとして、開口一番に「できるだけ多くの企業を見た方がよい」と。いろんな企業の話聞ききつつ、自分でその企業、業界について調べて興味を持っていくプロセスが大事だったということです。[大貝]